

「読者」からの距離と「筆者」たちの領域：高見順 「故旧忘れ得べき」における「筆者」の饒舌、論 評、沈黙について

安河内，敬太
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/1901717>

出版情報：九大日文．28，pp.75-90，2016-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



「読者」からの距離と「筆者」 たちの領域

——高見順「故旧忘れ得べき」における

「筆者」の饒舌、論評、沈黙について——

YASUKOCHI
安河内 敬太

一 はじめに

高見順の文壇デビュー作「故旧忘れ得べき」（『日暦』昭和十年二月〜七月、「人民文庫」昭和十一年三月〜九月）は、主に学生時代に左翼運動とかかわりのあった小関、篠原、友成、松下の現在の生活が過去を交えながら語られている作品である。

この作品は代表的な転向小説であることと、饒舌体と呼ばれる文体をはじめ、特異な形式を持つという二つの側面から考察されてきた。そして後者に関してもいえば、作中に頻繁に登場する「筆者」に関する言及もしばしばなされてきた。例えば野口武彦は以下のように述べる。

作者は時に「筆者」と身をやつしつつ、視点を等分に配分する。篠原から眺められた小関。いつてみれば、作中人物
同士の視点の互換条約のごときものが成立しているのでは

る。そして、まさにそのことによつて、『故旧忘れ得べき』の世界は、たんなる描写を越え出たもう一つの客観性を獲得しているといえよう。⁽¹⁾

ただ、従来の「筆者」への言及はややもすると「筆者」の視点に関する議論に傾き、「筆者」が直接登場する場面そのものに関しては軽視される場合があった。例えば篠原秀征は「筆者」について以下のように述べる。

その名が名乗られて登場する場合の「筆者」は、ひたすら筆致の愚鈍さをわびる場合、あるいはかぎりなく伸びていく回想の筆を物語の現在に引き戻すといった、時間を司る役割を担うことが多い。ただし、「筆者」の名の下に物語中に介入してくるケースのみをどこまで見ていっても、その言動には小説における装飾品以上の意義は見られず、その存在はあくまで「形式」にとどまっている。（中略）「描写の後ろに寝ていられない」作者は名乗りを上げて作中登場してくるものばかりではなく、地の文のなかにも登場してくるのであり、要するに、「筆者」は常に物語に存在しているのである。⁽²⁾

頻繁に見られる語り手の価値判断や人間観など、「筆者」という個人に由来すると考えた方が都合がよい語りがなされていることを考えれば、「筆者」が常に存在するという主張には頷

かれるものがある。とはいえ、それは「筆者」の登場そのものを軽視してよい理由にはならない。そしてこの作品には直接的な「筆者」の登場を重視するに足る特徴がある。それは、「筆者」の介入が、「筆者」と「読者」の関係性を暗示するということである。

そもそも語りの場において誰が誰に語っており、両者の関係は如何なるものかということは、どのようなエピソードをどのような姿勢で語るのか、ということを決定づけ、ひいては物語全体の成立に大きな影響を及ぼす。そして、この作品における「筆者」の登場は、それが頻繁に「読者」への言及を伴うがために、作品の語りの場に関する示唆を与えるものである。現に、後に詳しく見るように、篠原秀征が言及する「読者」への謝罪や回想の筆の中断などは、「筆者」と「読者」との関係を考える上で重要な意味を持つ。

そのため本稿では主に「筆者」の名のもとになされる発言や「読者」への呼びかけを検討しつつ、「筆者」と、彼が呼びかける架空の読み手「読者」⁽³⁾との関係がどういったもので、それが語りにどのように影響しているのかを明らかにしたい。なお「筆者」の直接的な登場に言及する論については、後に関連のあるところで触れたい。

二 転向的な語り

この作品における「筆者」と「読者」との関係は、第一節の

以下の箇所において端的に描かれている。

思へばなんとした愚かな廻り道を筆者はしたことであらう。筆者が饒舌を弄してゐるうちに、われわれの主人公たる小関健児は迅くに散髪をおへ、彼の所謂味気ない家庭へ既に帰つてゐるではないか。読者には甚だ申し訳ないことながら、これといふのもひたすら筆者の魯鈍のせみであるが、理髪店にはいりなやんでゐる小関の稍常規を逸してゐるやうな有様は、これは決して彼の肉体的異状に帰因したものであるといふその一言に、以上の饒舌は要約すればできるところを、ついクダクダと説明の筆がのびて了つたのである。⁽⁴⁾

ここで「筆者」は「読者」に対してへりくだり、自身の語りを詫げる。この「読者」に対する卑屈さは後の箇所でもしばしばみられる。その一方、「筆者」は登場人物に対しては多くの場合辛辣な批評を行う。即ち、この作品には「読者」、「筆者」、登場人物という、「読者」を頂点とするヒエラルキーがあると言える。

そして、登場人物に対しては辛辣である「筆者」が、「読者」の存在を想定することによって、自身の不手際を自覚、あるいは謝罪するというのは、第三節において述べられている「似而非マルクス主義者」(あるいは篠原の言葉を借りて言えば「実行力のない反省野郎」)に「筆者」を近づけている。

世にはかういふ人物がある。——いつだつて自分は実行力がない癖に、他人に対しては公式的な冷淡な左翼的批判を下すのが常で、あいつは墮落した、なつちやないと言ひ、ではさういふ御本人はどうかといふと、口先だけの何もしない似而非マルクス主義者（後略）

また第七節の、松下に関して述べられた以下の箇所も、ほぼ同様のことを語っている。

彼が今はもうすっかり駄目になり女房を働かして取つた金で放縱懶惰な日々を送つてゐるといふ悪評を聞くと、いままでの盲目的な感情を丁度逆にした程度の、独り合点の輕蔑を忽ち彼の上に浴せた。さういふ感情的な好惡のうちに自分自身なんにもしない癖に、松下は自らを左翼に任じてよろしい理由を見出してゐた様である。

この作品において、作者である高見順が転向者であるという伝記的事実とは別に、語り方において転向者である登場人物との接近が見られることは、既に石光葆が登場人物の生活に代表される「くずれた内容」と、それを描く「くずれ」た文体という観点から指摘している⁽⁵⁾。しかし石光の指摘以外に、他人に対して批判的な態度を取る、あまり褒められた行動を取っていない人物であるという点においても、作中人物と「筆者」との

類似を見ることが出来る。

また第一節において、小関は以下のような種の思考に没頭するあまり目の前の現実を忘れるが、先に引いた第一節の「筆者」の謝罪は、小関のそういった行動をなぞるものである。

もはや立派に神経衰弱だ。小関はさう力み返つて側の新聞紙を横目で睨んでゐると、豊美が、早くなさらないと遅刻してよと肩に手をかけた。彼は黙つて立ち上り、俺は病氣だと呟いたが、茶の間の柱時計に眼をやりその長針がすでに十五分過ぎてゐるのを見ると、さア大變と飛び上つて叫んだ。

そして彼は過ぎ去つた目のことをいろいろと思ひ浮べてゐるうちにある事を不意に思ひ出し眼が急に輝いて来て、さうだ、俺は神経衰弱ではないぞと言つた。同時に昼休みの時間が既に過ぎてゐるのに氣付き、土手の砂利道をあたふたと駆け出して行つた。

さらに以下の記述も「筆者」がこのあとの箇所で脱線を長々と行ひ、「読者」に対し「筆者の魯鈍のせゐ」であるという自己卑下を行うことを考えれば、「筆者」の性質を書いたものとしても読むことができる。

髪が蓬々になる迄理髪店に行かぬといふのはこれは決して

吝嗇の爲ではなく、何事によれ不精な性質のひとつのあらはれに過ぎない。不精の裏に、それに劣らぬ神経質がくつついてゐるのが、時々はげしい自己嫌惡に陥らせる程の始末の悪い人間に小関をしてゐた。

以上のように第一節においては特に、「筆者」の語りと登場人物の行動との間に類似性を見ることができると。

ところで、第一節で「読者」に謝罪する「筆者」だが、同様の脱線は作中で繰り返されている。その際、「筆者」はそれらの脱線は意図的に行つたものでないと述べる。

扱て、筆者は思はず脱線をしてつたが、読者にもう一度、例の寮生の食堂にはいつて戴きたいと思ふ。（傍線は引用者による。以下同じ）

秩序立ててといふ約束にも拘らず、支離滅裂な回顧と成つた。幸ひ筆は現在に戻つてゐる故、これで打切り次節に移らうと思ふ。

筆者が思はぬ長話をしてゐた間に、新橋駅で前田芙美枝を待つてゐた篠原辰也は既に彼女と千足屋で食事をすまし、銀座の通りを歩いてゐる。彼女は前にも書いたが、その大きなクリッとした眼を実に活潑に絶え間なく動かす割には、その口の動きが鈍かつたから、記すに足るべき会話が

篠原との間に別段取りかはされなかつたのは幸ひであつた。

このように、「故旧忘れ得べき」では無意識に脱線した後で「筆者」がそれに気付いて弁解する、という箇所が複数見られる。

このような脱線を含めた、作品に見られる「筆者」の饒舌については、野口武彦が転向体験と関連づける形で以下のように述べている。

書きにくいが書かなければならない。いや、現在かくある自己のありかをつきとめるためにも、むしろ書きたい。そんな主題の内奥ににじり寄るに際して、作者が戦術的に採用したスタイルは饒舌体であつた。あたかも話が核心に達するのを避けるかのように、ぺらぺら喋りまくつていわば一種の遲滞行動に出る。（中略）時間も現在と過去をめぐるしく往復し、脱線また脱線をくりかえすのである。⁶⁾

しかし、「筆者」が無意識のうちに没頭してしまふ脱線が過去の話題であり、それによつて物語の現在を見失つてしまつてゐるのを考慮すると、ここにも過去の体験に固執する登場人物たちとの類似性を見ることが可能である。第三節に見られる、以下のような過去へと遡つていくナンセンスとも言える語りも、「筆者」の過去への志向の表れと見ることができると。

——飛んでもない、僕は酒にはもてるけど女には君みたいにもてないからなといふ声は正しく橘のであつた。(中略)ひよつとすると橘君はよその病院へこつそり行つてゐるんぢやないかと言つたのに対し、飛んでもない云々の前述の応答があつたのである。かういふ話に成つたのは、橘の友人である内科の医局員が篠原の前に、橘の治療を受け、あれは医者なんだよといふ橘の言葉がきつかけで(中略)そして前述の会話へとやがて導かれて行つたのであるが(後略)

そして、第一節の例で見たように、過去へと向かう記述を修正する契機となるのが、「読者」であるのなら、その構図は今、あるいは未来を志向する「読者」と、過去に拘泥する「筆者」という対比を作り出しているように思われる。その点で興味深いのは第三節の以下の箇所である。

扱て三人は銀座の不二屋へはいつたのだが、その場の光景は省略させて貰ひたい。何故なら三人は食事が終つてそこを出ると、彼等の所謂アの字のゐる西銀座の酒場へ行つた。筆者も亦読者と一緒に一刻も早くそこへ行きたい衝動に駆られ、メシを食つてゐる無風流な場面などに到底停滞してゐられないからである。

これは「読者」の未来への志向と共に、珍しく「筆者」の未

来への志向が述べられている場面であるが、この直後、「筆者」は不二屋でのエピソードを語り、やはり物語が未来に向かうのを遅延させてしまう。

以上のように、「筆者」は登場人物たちと同じく、過去に拘泥する、転向者に類似する存在として描かれ、「読者」はそれに対し距離を置く存在として描かれている。つまり「筆者」―登場人物―に比べ、「筆者」―「読者」の関係には溝があると言える。そしてその溝は「筆者」の語りに様々な影響を及ぼしている。

三 「筆者」による人物への評価

この作品では、登場人物に対する語り手の評価が露骨に語られる。例えば平野謙は登場人物の描き方について、以下のように自虐的過ぎると批判するが、「筆者」による辛辣な論評もその要因の一つであろう。

『故旧忘れ得べき』の主要な登場人物は、小関にしても篠原にしても、著者の分身たることは明らかだが、そのためか、著者はあまりに自虐的に描きすぎてゐる嫌がある。このことを逆にいえば、著者は昭和初年代のコミュニケーション運動の本流を手つかずのままにソツとしておいて、そのプラスとマイナスをみきわめようとしていないのである。どうせ悪いのはおれたちだけだよ、と居なおることで、かえ

ってコミュニケーション運動そのものをむかしのまま絶対視する結果になっているのである。⁽⁷⁾

また、篠原秀征は第三節における小関と篠原の認識の食い違いについて以下のように述べ、「筆者」の「読みの方向性を決定づける役割」を指摘する。

それまでよそよしく取りつく島もなかった小関が、金主である篠原に対して融和な態度をとりだしたことに気付かず、篠原は小関の態度を虚無感の現れであるという見方をしている。そして、「筆者」はこの両者の心持ちのズレに対して、小関の貧乏人根性に気付かず、虚無のなせる技として自分に結び付けて考えるのを、「篠原の自己合理化」であるとの感想を述べている。⁽⁸⁾

このように、「故旧忘れ得べき」においては「筆者」が積極的に人物に対する論評を行っていくのだが、見逃せないのは、その論評はただ単に語り手の独断という形をとるのではなく、多くの場合、それを裏付ける何らかの具体的な事実が伴っており、「筆者」が自身の評価に客観性を付与しようとしている形跡が見られる点である。例えば以下の箇所などである。

友成は第一節、富士見軒のぐだりで見らるるごとき嗜虐的傾きのある青年で、他人が左といへば自分は右と我を張ら

ねば気のすまないひねくれたその性質が、現在は少々直つたが（後略）

しかし新奇好みといふ点では、友成の方が篠原より一枚上手であつた。話が前後するけれど、それから数年後、友成がドイツ女のマルタを携へて彼の所謂ドイツ留学から帰つて来た時、マルクス主義文学を口にした篠原に彼は自信にみちた語氣でかう言つた程である。

母をひきとることをかうして彼女はなんだかんだでいひそびれてしまつたが、それには彼女の弱さにも増して、彼女の夫の日常において、彼女の意向などちつとも頭に入れない強さが大きな理由であつた。且彼はたとへ彼女が手を合せて頼んだところで到底うんとは言はなかつたらう。さう考へることの正当な証拠として、彼は彼女がその話を持ちかけてきた時、それを拒絶する理由をちゃんと胸のうちに用意してゐたのであつて（後略）

これらの箇所では傍線部が、「筆者」による評価の、一種の例証として機能している。そして、そのような客観性を成り立たせるものとして、小説の世界を事実として扱う「筆者」の態度がある。野口は「筆者」の登場や「読者」への呼びかけを含む箇所について以下のように述べる。

描写が描写として完結するためには、實際の話、右に傍線して示した文章は unnecessary である。自然主義文学をはじめとするいわゆるリアリズム小説が、いかにこうした部分を削ぎ落すことにつとめてきたかは、いまさら説明するまでもあるまい。⁹⁾

だが、物語の中で「筆者」は「小説的作為」を否定し、物語の内容も、「筆者」とは独立に存在する世界を「筆者」が「観察」している、という体を取っている¹⁰⁾。つまり、たとえ「筆者」の存在がリアリズムを脅かすものだとしても、「筆者」自身はあくまで物語が事実であり、「筆者」はその世界を観察して記述しているだけであると強調している。

さらに観察者としての「筆者」は、語り方について「読者」に謝罪するいささか頼りなげな態度とは対照的に、登場人物を観察するという点に関しては間違いがないことを幾度も主張する。

さういふいまの彼女、即ちこの節の初めの部分を読んで読者が頭の中に描かれた彼女と、その後の回想のなかに現れた彼女とは大分違つてゐることに読者は不審の念を抱かれたであらう。が、これは筆者の誤ではないのであつて（後略）

これは当時のことであつて、幾星霜を経た今日の篠原や友成が、往日の俤をとどめぬ所があつたにしろ、それは筆者

の観察違ひといふより、彼等が受けた幾多の変転にその責があるだらう。

以上のように、例証としての事実と、それに対する誤りのない観察を主張することにより、「筆者」は自分の評価に正当性を付与していると言える。即ち、この作品においては、この物語は事実であり、「筆者」からは独立して存在する自律的な世界であるという装いが、「筆者」の正当性の主張に奉仕していると言える。

このような装いは「読者」の納得を得るために構築されたものであらう。「筆者」と「読者」との間には先述のように溝があり、そのため「筆者」との無条件の共感を期待することはできない。故に「筆者」は事実によつて、論評が客観的で公正であることを装う¹¹⁾。

ただ、両者の溝は、客観的であるという装いによつて「読者」を説得しようという「筆者」の語りの傾向のみならず、論評から「読者」を排除しようという傾向をも生み出しているのだが、次にそれを見てみたい。

四 排除される「読者」

関谷一郎は「筆者」の役割に関して以下のように述べ、高見が登場人物に同一化しないようにするための装置であると指摘している。¹²⁾

「故旧忘れ得べき」において作者が「筆者」という視座を登場人物の葛藤から外化して行ったのは、高見自身どこまで意図的であつたか明らかではないが、虚構意識を自由に解き放つことになった。「筆者」という媒介物が作品に顔を出すことによって高見順の「私」は制御され、「私」の経験は外在化された「筆者」の眼によって戯画化されつつ、あくまで作品内の事象として形象化されるに到っているのである。

そして、その観点から第五節の「君のその惨めな後姿に筆者の胸は痛み、君の姿を書き追つて行くことの能はぬ程である」という箇所に関して、以下のように批判している。

小関の苦しさをこれまでのように客観化しつつ戯画化によつて救済する方法が取れなくなっているわけである。したがつて「読者」の側も小関の苦痛を共有することを強いられ、救われない思いを抱かされてしまうという、作品として望ましくない結果になっている部分である。⁽¹³⁾

関谷の批判そのものについては後に詳しく検討するとして、ここで注目したいのは寧ろ、登場人物に対するどのような評価であれ、それを行うのが「筆者」であり、作品で「筆者」が想定し何度と呼び掛ける「読者」は、その種の行為からは排除さ

れているということである。

例えば、先程も引用した「筆者」の観察が語られる箇所である。

さういふいまの彼女、即ちこの節の初めの部分を読んで読者が頭の中に描かれた彼女と、その後の回想のなかに現れた彼女とは大分違つてゐることに読者は不審の念を抱かれたであらう。が、これは筆者の誤ではないのであつて（後略）

すでに述べたように、この作品において「読者」は「筆者」の上に立つ規範として機能しているのだが、この箇所のように「読者」の目が「筆者」から登場人物に向かつた場合、それは登場人物の人格へとは向かわず、人物を観察して書き記す「筆者」の領分へと即座にスライドしており、「読者」が登場人物ではなく、あくまで「筆者」に対する規範としてしか機能しないことを示している。

また、「読者」が登場人物の評価に関わつていえると言える箇所もあるのだが、そこでの「読者」は以下のように「筆者」を通ずることによつてのみ、辛うじて参加を許されている。

いま彼から感動の言葉を矢継ぎ早に浴びせられてヘンに拗ねたやうな顔を小関が見せてゐるのは、さういふ場合の多くの他の友人のやうに、チェツ、そらぞらしいと小関も亦反撥してゐるのではないかと考へられるが、小関にさうした

強気の欠けてゐる事は読者の既に知らるる通りである。

さう言つて来ると、篠原の荒んだ生活だつて、虚無の致せる業などといふのは、なんでも自分をいい兎にしたがる我儘な篠原の自己合理化であると考へられ、後節に展開される彼の情痴生活を見たら、読者もさういふ筆者に賛意を表してくれるに相違ない。

ここにおいて、登場人物に対する「筆者」の評価は自明のことであり、「読者」はそれを全面的に肯定するものとして書かれている。

さらに、「読者」と「筆者」の見解が相違する以下のような場面も、第五節に一応は存在するのだが、幾分か冗談めかした物言いではあるものの、「筆者」の文語的な命令によつて「読者」の反応が拒絶されているというのは、人物の評価における「読者」の位置を考えれば象徴的であらうと思われる。

僕の気持は寧ろアナーキズムに近い。読者よ、年少稚氣の言葉と笑ふ勿れ。すなはち、当時の幼い風潮が生んだ次のやうな挿話も笑つて了へない事実であつたのだ。

こういった人物に対する評価を、「筆者」が自分の義務のやうなものとしてとらえていることは、第九節の以下の箇所に見ることができる。

読者よ。二人の会話をここで中断する不躰を筆者にゆるされ度い。筆者はなんとも胸糞がわるくなつて、もはやこんな忌はしい会話を忠実に書きとめる苦痛に堪へられなくなつたのである。即ち脆弱な筆者は、この男女のいづれかを正しいとし、どちらかに筆誅を加へようと思つても、哀しい哉、その力を持つてゐない。されば徒らに息苦しいのみで、それからのがれる為にはただ筆を転ずる以外にせんすべを弁へぬのである。左様、篠原に是非をきいて見ようとも思つたが、篠原も亦苦痛に嘔まれた表情である。

さらに、ここでは判断を下せない「筆者」のかわりが篠原となつており、評価を下すという要請が「読者」へと向かうことはない。以上のように、「筆者」や登場人物から距離を置く「読者」を、「筆者」は登場人物への評価から排除している。それは即ち、そこに「筆者」と登場人物による排他的な集団が構築されていることを意味する。

しかし、ただ単に「読者」を排除しようとする意志のみが「筆者」にあるのだとしたら、そもそも作中で「読者」に対する呼びかけを繰り返す必要がない。その点において「筆者」は転向者たちの物語を「読者」に読まれることを志向している。結局の所、転向者たちの物語は読まれたい、しかし転向者たちに対する批判はしてほしくない（それは自分の領分である）、というのが、この作品における「筆者」の基本的なスタンスであると言

えるだろう。

その一方で、「筆者」は既に見たように、「読者」に対して自身の語り方を卑下して見せるが、これは「筆者」を転向者に接近させるという先述の効果以外に、登場人物の批判に加われない「読者」を、作品に引き込むための補償として捉えることが可能である。つまり「筆者」は排他的な集団のために、積極的に身代わりとなっているということができ、結果的にその自己卑下は、「読者」を巻き込むためのパフォーマンスとなっている。

しかし、「読者」に知らせたいはずの転向者たちの物語の中で、「筆者」は転向体験そのものについては最後まで沈黙を保っている。次にそのことについて考察したい。

五 転向のメタファー

ただ、その前に転向小説に転向体験が描かれておらず⁽¹⁴⁾、思想性が欠如しているという批判に対する、安藤宏の反論を見てみたい。安藤は以下のように述べて、私小説的な転向小説の中にはメタファーとして転向体験が暗示されているという指摘を行っている。

「転向」というのはそれが明快な説明であればあるほど、結局は後から作った結果論になってしまうことだろう。そうした結果論、明快さといかに戦うかというところから、

おそらく「文学」の問題が始まる。そのために彼らが試みたのが、たとえば夫婦関係の亀裂をメタファーに、自己と世界とのつながりの危機を表現していく迂回戦術なのであった。この場合、妻との日常的な生活を再発見していくプロセスそのものが、目的のためには手段を選ばぬ運動自体の偏向性の発見に重ね合わされていくことになる。大きな問題をあえて小さく語っていく戦略、とでもいったらよいのであろうか。

高見順もまた、この時期、『故旧忘れ得べき』（日曆）「人民文庫」昭和10・2（昭和11・9）という転向小説を書いている。冒頭はまず、主人公が散髪に行こうとするが恥ずかしくて行けない、という場面から始まっている。長い間髪を切っていないことが店にばれてしまう、あるいは散髪したあと周囲から冷やかされるのが恥ずかしい、といった、あらためて口にするのがはばかれるような卑近な「恥」の感覚に、転向に伴う内面の苦悩、同志を裏切った罪の意識をメタファーとして託していくのである。⁽¹⁵⁾

このように、安藤は小関の感情に転向時の心情のメタファーを読み取る。

安藤のこの指摘は、この作品における登場人物の感覚がもつ役割を考えれば、納得できる部分はある。この作品において登場人物が過去を回想するきっかけとなるのは、ある言葉であったり、同窓生との邂逅であったりするが、その中で登場人物の

感覚もまた、過去を回想する契機となっており、感覚が過去と現在をつないでいる。

さきにある事と書いたのはこのいやな追憶に他ならなかったのである。自分はうまいと食べ、他人は食へないと言ふ。しかしそれがなんだらう。他人は他人、我は我ではないからだのに、それに対してムカムカするといふのは、——これは神経衰弱のためだらうか。もしさうとすれば、己れは八年ほど前から神経衰弱であつた訳だが、——ちがう。性質だ。

今ふと小学生の彼が、金光さま、お願ひですと祈つた物哀れな情景が彼の頭をかすめたのは、現在こそ金光教など信じてはならないけれど矢張りなにかに縋り祈りたい気持の相似たものが、追憶の断片を呼んだのであらうと思はれる。彼がわざわざ橘を尋ねて来たのは、治療をただでもらふ下心からであつた故に、彼のやうな弱気の若者には、さして親しかつた仲とはいへぬ友人にさうした申出を敢へてする事は、神よああ神よといった切なさであつた。

また、以下のように、感覚は異なる場所にいる異なる人物を結びつける機能も時に果たしている。

轟轟の拍手が捲き起こす昂奮の渦、眼には見えないその渦

が、小関の眼には濛々たる砂塵のやうな、形を取つて見ることができ、彼はどうとも勝手にしろと酔つた如き感覚で、思ひなしかその足も蹣跚と、先輩の待つてゐる入口の方へと歩んで行つた。

酔つてゐるといへば——丁度その頃、篠原と友成は富士見軒でウオッカを飲んでゐたのである。

故にこの作品において感覚とは、異なる時空をつなぐ契機となるものであると考えることができ、そうであれば登場人物の感覚を、過去にあつたはずの転向体験に結び付けることも可能ではない。

しかし、そのような解釈が成り立つとしても、結局の所、転向体験は誰もがわかる形で直接的には描かれてはおらず、そのため、転向体験について何故「筆者」は沈黙しているのか、という作品内レベルでの疑問は依然として残る。

もとより、「筆者」は先程取り上げた脱線や以下の例のように、語りすぎるといふ特徴を持つている。

いや、待て、篠原とこの場所との交渉はまだまだ伏せて置くのが、小説の作法であつたらうが、ちよつと附言したい
誘惑に負けた筆者をゆるされ度い。

また、「筆者」は登場人物が知る由もない事実や、複数の人物の内面や、その人物の意識されない内面などをも観察でき、そ

れらを語ることができる。とはいへ、「筆者」が作中のあらゆることを知っているわけではない（少なくとも知らないと言張ることがある）。このことに関しては、関谷が以下のように指摘している。

第九節になると小関の夢の中まで「目撃」してしまふ「筆者」が、第五節の場面では見ていなかったから書けない、と自己を限定付けているわけである。まさに神出かつ鬼没の自在さである。⁽¹⁶⁾

しかしここで注目したいのは、そういった「筆者」が知らないと言張することではなく、「筆者」が語ることが出来るにもかかわらず、敢えて語らないことである。これには以下のような例がある。

便所の隣りに位置する為の不愉快さはそれだけにとどまつてゐなかつた。よる夜中、スリッパをパタパタいはせて駆け込む音、水洗便所のジャ―、それから――（余り尾籠にわたる故、以下省略す。）

何のためのオリ―ヴ油であるかは、今は既に妻子のある松下の名譽の爲にも流石に他言を憚らねばならないけれど、当時紅顔の美青年であつたS――の寢室で、その小瓶は何かの機勢はげずみでわれたらしい。

筆者もどうやら語るのを躊躇せねばならぬ破廉恥極まることを、小関は秋子に対して行つた夢を見たのであつて（後略）

そして、もしも「故旧忘れ得べき」を読む読者が転向体験を重視し、その結果それが敢えて隠蔽されていると結論付けるのであれば、先に引用した箇所は、敢えて語られない、という点で転向体験との類似性を持っている。ならば同じカテゴリーに属するものとして、これらを転向体験のメタファーとして扱うことができる。つまり、「筆者」にとって転向体験とは余りに「尾籠」であり、「他言を憚」ることであり、「破廉恥極まる」出来事である。また、同様に以下の箇所は、「筆者」にとって転向体験があまりにも「惨め」なために書くことができないものであることを示す。

小関君、君は何故拒まなかつたのだ。否！ の強い一言で、恐らくは同室の若者の無茶を充分封ずることができたであらうに。君のその惨めな後姿に筆者の胸は痛み、君の姿を書き追つて行くことの能はぬ程であるのに、自然は恰も弱肉強食の歌でもこの時歌ひはじめたかのやうに、骨を刺す如き寒風で廊下の硝子窓を鳴らし出し、その窓の硝子は所々方々こはれてゐるのが多いから、寒風は遠慮なく君の皮膚に嘯みつく始末である。

故に先程も引用した、関谷が「小関の苦しさをこれまでのように客観化しつつ戯画化によって救済する方法が取れなくなっている」と批判する「筆者」の高見への接近、そして小関への接近には、単純に「作者の最も近い分身である小関に対する「苛め」に、生身の作者が憤り気持を動揺させてしまったため」⁽¹⁷⁾というだけでなく、ここにおいて小関の惨めさが、転向体験へとつながる要素を持つからであるという理由を想定できる⁽¹⁸⁾。以上はいずれも「筆者」の沈黙に説明を与えるものではある。だが、これまで述べて来た「筆者」と「読者」の関係からその沈黙を考える場合、最も注目に値するのは、これも先程引いたアパートでの諍いの場面であろう。

読者よ。二人の会話をここで中断する不躰を筆者にゆるされ度い。筆者はなんとも胸糞がわるくなつて、もはやこんな忌はしい会話を忠実に書きとめる苦痛に堪へられなくなつたのである。即ち脆弱な筆者は、この男女のいづれかを正しいとし、どちらかに筆誅を加へようと思つても、哀しい哉、その力を持つてゐない。

すなわち「筆者」にとつて、転向とは「なんとも胸糞がわるくな」るような「忌はしい」ものであると同時に、「いづれかを正しい」とすることもできない、理非の判断をつけかねる出来事なのである。

そして自身でその判断が下せないからこそ、「読者」を人物

への論評から排除し、自身で独占する「筆者」には、転向体験を語ることができないのではないかと考えられる。

六 終わりに

以上、「筆者」の発言から「読者」との関係を探ってきた。「筆者」はヒエラルキーと過去への拘泥により、登場人物に近い存在として位置づけることができ、「読者」と「筆者」との間にはある種の溝がある。それにより「筆者」は登場人物に関する論評に客観的な装いを付与して「読者」を納得させようとし、さらに「読者」を登場人物への論評から締め出す。しかしそのような傾向があるからこそ、「筆者」には転向体験を語ることができない。

またすでに述べたように、登場人物への論評に加われない「読者」への補償として、「読者」は「筆者」の語り方に対する規範になる。以上のようなことの結果として、語り方においては意図せざる語り方をする一方で、物語世界の観察においては正確である（と主張する）「筆者」の二つの面が出来上がっていると言える。

このように、この作品においては、「読者」に対する「筆者」の隔意が、転向体験の沈黙と「筆者」の二面性という特徴の要因となっている。「故旧忘れ得べき」の「筆者」は「読者」を強く意識し、そのために、ただ単に「筆者」によって想定されたに過ぎない存在がその語り方を決定づけていると言える。

勿論、「筆者」における登場人物に対するある種の親密さも「読者」への意識同様に、その語りに影響を及ぼしており、その意味でこの要素を軽視すべきではない。そのため厳密に言えば、登場人物との親密さと「読者」との疎遠さという「筆者」の立ち位置が、語り方を決定づけているといえるべきであろう。

そして勿論、はっきりと観察できるかどうかは別として、理屈の上ではこういった、書き手と読み手と登場人物の三者が取り結ぶ関係には、作品によって異なるパターンが有り得るだろう。それらの関係も「故旧忘れ得べき」と同様に、書き手が何を書くのかを決定づけ、そして（たとえ読み手に対する親密さが見られる場合においても）その関係に起因する固有の秘密を作り上げることになる。

※ 旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

※ 本稿は平成二十六年（一九六四年）日本近代文学会九州支部春季大会（平成二十六年七月六日 於山口大学）における発表に加筆、修正を施したものである。御意見を下さった方々に厚く御礼申し上げます。

【注記】

- 1 野口武彦『現代文章講義（十二） 饒舌という思想——高見順『故旧忘れ得べき』——』（『日本語学』四一八号 昭和六十年八月）
- 2 篠原秀征『故旧忘れ得べきノート』（『中央大学大学院論究（文学研究科篇）』三一—一 号 平成十一年三月）
- 3 本稿においては「筆者」を作中に登場する虚構の存在として扱うが、

鉤括弧付きの「読者」もまた、「故旧忘れ得べき」の「筆者」の呼びかけの中にのみ存在する架空の読み手であるとみなす。高見が（恐らく）意識していたであろう「日暦」の同人達をはじめとする「故旧忘れ得べき」の実際の読者を、この「読者」に代入することも可能性として考えられなくはないのだが、高見の「処女作と出世作」（『月刊文章』昭和十三年二月）の以下箇所を見ると、高見が実際に意識する、連載当時の「故旧忘れ得べき」の読者と、作品中の「読者」との間には差違があることがわかる。

これ（故旧忘れ得べき）——引用者注）が連載の途中で、はしなくも芥川賞の候補にのぼり、私の出世作といふことに成った。——候補になつたときは連載中の未完であつたが、人々にとやかう言はれ出すと、何か照れ恥かしくなつて、筆が続かなくなつた。誰も見てないところで、自分ひとりの気持を紛らすためにヤケな声を出してコリヤコリヤとステコ踊りをやつてゐるに似た作品であつた。見物がまはりを取巻いては、ちよつとステコ踊りの当人は恰好がつかないのである。（『高見順全集 第十七巻』 勁草書房 昭和四十八年五月）

ここで高見は連載中の、読者への意識の変化について語るのだが、実際の作品を見てもそのような意識の変化が作中の「読者」に目立った影響を与えているとは言えず、寧ろ「筆者」が「読者」を強く意識するという点では、作品の方が、芥川賞候補になつた後に高見が抱くことになる読者への意識を先取りしている。以上のことから、ここでは「読者」の虚構の存在としての側面を重視する。

- 4 本稿における「故旧忘れ得べき」の引用は『高見順全集 第一巻』（勁

草書房 昭和四十五年十二月)による。

5 石光は以下のように述べる。

時代の先兵たるべく理想と希望にもえていた敏感な若者たちが、思想と実践に敗れて生きる目標を失ってからは、闇の中に低迷せざるをえなかった。苦しまぎれに酒や女に親しんでデカダンスな生活をおくる——敗北、頽廢のくずれた内容を、小説形式からいえばくずれた饒舌体で支離滅裂に描きあげたことは、偶然であつたにしろ、最もふさわしい表現方法であつたかもしれない。(石光葆『高見順人と作品31』 清水書院 昭和四十四年六月)

6 野口武彦「現代文章講義(十三) 饒舌という思想(続)——高見順『故旧忘れ得べき』——」(『日本語学』四—一〇号 昭和六十年十月)

7 平野謙「解説」(『高見順文学全集 第一巻』 講談社 昭和三十九年十二月)

8 同前掲注2

9 同前掲注1

10 このことに関し、篠原秀征は以下のように述べる。

『故旧』の物語の現実とは、「筆者」が眺める現実として、あらかじめ存在しているものであり、「筆者」は物語の現実を司る「神」として存在しているのではない。(同前掲注2)

11 付け加えればこれは第十節における沢村の回想において、立場が異なる人間がいる中で、登場人物が沢村に関するそれぞれの主観的な印象を具体的なエピソードを交えて語っているのと同様である。

12 高見が自己の経験語るにあたり、「筆者」が一定の役割を果たしていることを指摘する論としては、このほかに磯貝英夫の論がある。

あきらかに、『故旧忘れ得べき』は、近代小説以前の戯作の伝統の上に立つた作品である。作者が直接顔を出して物語を補完するような形式も、もちろん、そこでの普遍的な形式である。

磯貝はこのような指摘の後、高見が「鬱屈し、分裂した自己を全面的に吐きだそうと」する上での「心理的抵抗」を和らげるために導入した方法について、以下のような指摘を行う。

だが、さらに、その抵抗をやらわけるクッションとして設けられたのが、この作品における、戯作的設定と多角的な饒舌体ではなかったかと考えられる。羞恥の感情を触発する心的抑圧を、戯画化と自己分裂によってそらしつつ、内部のモダモダを開放することに成功したのである。(磯貝英夫「故旧忘れ得べき」(『日本近代文学』四号 昭和四十一年五月))

13 関谷一郎「高見順素稿」(『現代文学』三三三号 昭和六十二年六月)

14 高見自身もこの問題については、後年「昭和文学盛衰史」(『文学界』昭和二十七年八月〜昭和二十八年十二月、昭和三十一年一月〜昭和三十三年十二月)の「転向について」の章において、以下のように述べることになる。

転向文学が転向の過程や転向後の思想傾向を曖昧にしか書いてないのは、転向文学としてだけではなく、文学そのものとしても、それは重大な弱点である。作品として、それでは駄目である。だが、それは書けなかつたのだ。それを書けといふのは、転向作家にとつて単なる文学批評といふ以上に拷問者の怒声を連想させるのだつた。

(『高見順全集 第十五巻』 勁草書房 昭和四十七年十月)

15 安藤宏「私小説」とは何か」(『近代小説の表現機構』 岩波書店 平

成二十四年三月)

16 同前掲注 13

17 同前掲注 13

18 ついでに言えば、この場面は小関が篠原の吐瀉物を片付けるように強制される場面であり、嘔吐と転向体験の（密かな）提示が一つの場面で行われていると言える。その点において、「人民文庫」に連載が再開された際、高見がまえがきで述べた以下の箇所と奇妙な符号をなしている。

当時、私はこれ又各種の事情からものごとの暗い方にばかり鼻を突き込み眼を注ぐことから、どうしてもぬけられなかつた。私の五臓六腑にはその為、汚い臭い奴がいつぱいつまり、そのドロドロした眼もあてられない奴を小説的な形式のうちに思ひきり吐きだしてく

れやうと考へた。「故旧忘れ得べき」はさうしたなんともいへないゲロであつて、もしかすると小説ではなかつた。（「解題」〔高見順全集 第一巻〕）

なお、篠原の嘔吐と高見の「ゲロ」という言葉の関連については既に百瀬久が指摘しており、「高見順にとって転向とは「吐き気ばかりで出るものがない苦しさ」として消化器系の生理的感覚としてしか表現しようがないものであつたのだろう」（百瀬久「高見順『故旧忘れ得べき』論——消化器系生理の方法——」（『東洋』四三—二号 平成十八年五月）と述べている。

（九州大学地球社会統合科学府博士後期課程三年）